

# 電子書籍と紙の本： 個人的な経験から図書館に与える影響まで

松田 潤

## はじめに

本稿では2004年頃から始まる筆者の個人的な「携帯可能な」電子書籍体験に基づいて、2010年に始まる日本での電子書籍元年といわれる「騒動」を整理することにする。

まず「元年」に対する「紀元前」での経験からはじめて、元年からの経験に基づいて読書のあり方から書籍のこれからと図書館に与えるであろう影響について考察をする。

### 1. ハードウェアとしての電子書籍リーダーの変遷：「紀元前」の経験

筆者は2004年に松下電器産業の電子書籍リーダーΣ Book(37,000円程度)を購入し、ほぼ同時にSONYの電子書籍リーダーLIBRIe(40,000円程度)を購入した。これらは筆者自身の本の電子化への関心興味に加えて、学生にも新しい動向を実際に手にとって感じてもらいたいと考えてのことであった。



図1 Σ Book

Σ Book は両面見開きの本をイメージした2面の画面を持つリーダーであった。白黒というよりはグレーの画面に濃紺で表示されるコレステリック液晶という電子ペーパーのものであった。それに対し、LIBRIeは1面でグレーの画面に黒で文字が表示される1ページの本を模したものであった。

Σ Book はコミックスが見開きで表現されることを前提にして開発されたもののようであった。しかし現実には2面の画面を支えるヒンジ部分がかかなり大きく、2ページ見開きというにはほど遠い印象をもった。配信される電子書籍は10daysbook というコミック中心の電子書籍書店、また凸版印刷がPC向けにデジタルコンテンツを販売するBitway から、やはりコミックを中心にしたものであった。データはパソコンを介してSDメモ리카ードに転送してリーダーで読むものであった。ただし当時のSDメモ리카ードはわずか128MG で5000円もしていた（歌田，2010）。

SONY のLIBRIe はΣ Book と比較すると軽く、E Ink という電子ペーパーを使った白黒の画面はより読みやすい印象であった。さらに、『マイベディア』と『現代国語辞書』などが内蔵されており、気になることばをその場で確認できるというのは電子書籍リーダーならではの優れた点といえた。

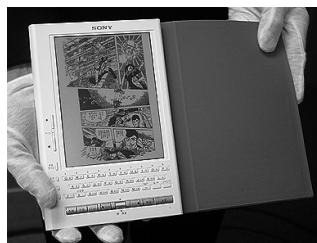


図2 LIBRIe

しかし、いずれもパソコンをネットに接続して電子書籍コンテンツをダウンロードして、さらにそれをリーダーにケーブルあるいはメモ리카ード（SONY は独自規格のメモリスティック）を使ってコピーをするという手間が必要であった。筆者にとってもっとも問題であったのは、入手できる図書にほとんど興味が持てないものしかなかったということであった。それが積極的に利用を続けることがなかった理由であった。マンガとビジネス書、小説といってもいわゆるノベルスといわれるエンターテインメントがほとんどで、ほかには「青空文庫」（<http://www.aozora.gr.jp/>）で公開されている著作権の消滅した作品であった。（この青空文庫はアメリカで始められたプロジェクト・グーテンベルクに影響を受けて始められたものである。）「青空文庫」の活動そのものは有意義な試みであるが、LIBRIe で内蔵メモリ500MG で約20冊が持ち運びできるとされていた。著作権切れの古典

を移動の際にでも読もうかと、入れておくにも、まさに「帯に短し、たすきに長し」ということは否めなかった。

SONY の電子書籍のデータは SONY が全額出資する電子書籍配信サイト Timebook Town（講談社，新潮社，大日本印刷，凸版印刷など 15 社の出版関連事業者の設立した企業が母体）からレンタルで入手することになっていた。著作権を考慮して 60 日が過ぎると消滅するというものであった。後に Timebook Town の会員である間は利用し続けることができる Long Timebook サービスが始められた。この期間限定の貸し出し方式は出版社側からの要請であったという（佐々木，2010）。また著作権保護の DRM（Digital Rights Management）の方式も BBeB という SONY 単独のものであったこともあるのかもしれない。この Timebook Town のサイトも 2009 年に閉鎖されてしまった。このことから、日本での 2000 年代初頭の電子書籍事業は早すぎた試みであったといえよう。とりえず電子書籍リーダーの実用性を探ることにはなつたと思われる。

日本のこの電子書籍リーダーには 1999 年から 2000 年にかけて行われた先行する実験があった。通商産業省の補助金を受けた大手出版社を中心にした電子書籍コンソーシアム（<http://www.ebj.gr.jp/>）という組織が行った社会実験であった。この実験について松浦晋也は、ファイルフォーマットがマンガの電子化を考慮した独自の画像データであった点、フォントの大きさを変えられなかったことや単語検索ができなかった点、さらに著作権権利が堅すぎて自分のパソコンに移して読むことさえできなかった点で失敗に終わったとしている（松浦，2011）。

しかし、ここで開発された画像形式のフォーマット（.ebi）はマンガと写真集を中心にした ebookjapan（<http://ebookjapan.jp>）の電子書籍で現在も使われているという。

2007 年にアメリカでは電子書籍リーダーとして Amazon.com の Kindle が発売され非常に売れていた。さらに 2009 年にはアメリカ最大の書店チェーンの Barnes & Noble から Nook というリーダーが売

り出された。これら2機種についてアメリカで売れているといわれるSONYのReader（2006年にアメリカで発売）はこのLIBRIeの後継機であった（西田，2010a）。KindleもNookもLIBRIeと同じE Inkを採用してほぼ似たような電子書籍専用機として設計されている。この点をもてもSONYの書籍端末として先行していた成果をうかがうことができる（西田，2012）。

しかし、日本の家電業界における電子書籍端末は、遡ると1990年のSONYのデータ・デスクマンになるだろう（関山，2001）。これは8cmのCD-ROMを読み取るというものであった。現在のように何冊もの書籍データをメモリ上で持ち運ぶというものではない。これはメモリ容量が限られていた時期の技術的な制約といえる。こうした端末を辞書に特化したものが、現在様々なメーカーから出されている電子辞書になる。これらについては今回の考察の目的からは外れるのでこれ以上は触れない。

## 2. 「紀元前」における失敗の原因

失敗の一番の原因は書籍データ点数が少なかったことであろう。

電子書籍コンソーシアムの狙いとして「書店で本を買うような手軽さと、本を探す楽しさをそのまま「電子の本」を買うときのしくみで実現できれば、子供から高齢者まで、男女を問わずに誰でも「電子の本」を探したり手に入れることができます」という記述がある（<http://www.ebj.gr.jp/active/b0101.html>）。しかし、Time Book Townにスタート時に準備された書籍は800タイトル。その後も現実にはマンガ本とビジネス本、少し時間のたったベストセラー小説では、いかに本好きであったところで、高価な電子端末を買って携行し外で読もうと思ったところで読むものがない。これでは、リアル書店に出向いて書棚を眺めることになるのが当然のことであろう。もし、絶版あるいは品切れになっている書籍が電子書籍化されていたなら違っていただろう。さらにいえば、専用端末の価格がパソコンと比

較すれば安いとはいえ、それを購入して少ないコンテンツをパソコン経由で移してまで読もうというのは、いかにも「オタク」的な行為であった。

アメリカと比較して日本で電子書籍市場が発達しなかった理由をいくつか考えてみよう。アメリカの書籍で電子化されて売れているのはハーレクインのようなマスマーケット・ペーパーバックであるという。これらは日本の文庫本に相当するが、紙、印刷、装幀、内容どれをとっても粗末なもので保存するような本ではなく、電子書籍の方が向いている（大原，2010）（安藤，2011）。

この状況は2010年の「電子書籍元年」といわれる年になってもそれほど変わっていなかった（立入，2011）（山田，2012）。

日本ではコンテンツの内容と数量は検討されないままに、ハードウェアとデータフォーマットの囲い込みが続けられているように見受けられる。とはいえ、電子書籍先進国アメリカもフォーマットによる囲い込みに関しては似たようなものかもしれない（西田，2010）。Kindleが2009年になって急に売れ出した理由はコンテンツの量によるという。Kindleの発表当時Amazonは9万冊の電子書籍を準備したというが、多くは著作権切れのものであった。しかしその後新刊書の多くが同時にKindle電子版でも出されるようになったという。後継機Kindle2が2009年に出されたときには23万冊、2010年には41万冊にまで増えていたという（西田，2010a）。ネット書籍販売店としてのAmazonは、電子端末Kindleの販売についてSONYの失敗を十分に検討して臨んだということだろう。電子書籍端末としての機能に加えて単独で無線通信機能を持っていてネットにリンクし、しかも通信料金をAmazon側が負担するのだ。利用者は何も考えずにネット上の書店Amazonで紙の新刊書と価格を比較して電子版を購入し、すぐにダウンロードしその場で読むことができる（歌田，2010）。電子書籍端末KindleのライバルであるAppleもこの点に注目していたといえる。Appleは既に、iTuneStoreを利用して音楽分野でネットでの情報販売の成功を経験していた。そこでiPhoneやiPadで

iBookStore を通じて電子書籍を売ろうとした。さらに Kindle 版の電子書籍データを読むことのできるアプリケーションを出したのだ。これによって Kindle がなくても Kindle 版の電子書籍を読むことができるようになった。また栞機能で Amazon のサイトに残った記録によって iPad あるいは iPhone、Kindle という端末に関係なく続きを読むことができるのである。

### 3. 紙の本と電子書籍の基本的な違い

紙の本は物理的な実体のあるものなのに対して、電子書籍はリーダーという端末は形があるが、本というコンテンツは手に取ることができない。このことをどのように考えるべきであろうか。

わが国で電子書籍についてその誕生と成長のすべてに関わってきた萩野正昭は、その顛末をまとめた『電子書籍奮戦記』で以下のように述べる。「端末が変わると読めなくなるものを、いったい本と呼べるのか。電子書籍が本であるためには、端末もろとも読めなくなってしまうのではないのか。」(萩野, 2011)

音楽ソフト、映像ソフトの変化を、この 100 年程度に限って観察してみても、書籍のこの状況は同様に想像のつくことかもしれない。

音響データでは蠟管から 78 回転レコード、33 回転 LP レコード、45 回転レコード、オープンリールテープ、カセットデッキ、MD ディスク、そして CD、SACD。映像では、35mm フィルム、16mm フィルム、8mm フィルム、 $\beta$  ヴィデオ、VHS ヴィデオ、LD ディスク、DVD、HD-DVD、ブルーレイディスク。技術革新によって、利用できる時間がどんどん短くなっている。それより何より、媒体を再生できる装置が残っていないのだ。このことは、パソコンが普及する過程で記憶媒体の変化と読み取り装置の変化で十二分に推測できたことだともいえる。ただ、電子化された情報は、情報そのものに意味があるのだから、さまざまにデータを移行させることが工夫されるわけである。

紙の書籍というものは、それ自身が携帯可能な情報端末であるということが決定的に違っている。しかも電気というものに頼る必要のないものなのだ。「インターネットの時代に書物などもう古いという人がいたら、わたしは尋ねてみたい。いったい牢獄にパソコンを持ち込むことができるかと。電気が断ち切られてしまった難民キャンプで、キーボードが打てるのかと」(四方田, 2007)。

紙の本は残るものであり、だからこそ図書館を作り、そこに保存し次の世代へ情報を継ぎ伝えるということの人々は営々と行ってきたのだろう。

とはいえ、紙の本が万全のものではないことも、これまでに酸性紙の問題、紙資源の枯渇などからもあきらかである(津野, 2010)。増殖し続ける本は図書館、あるいは個人にとっても蔵書スペースが問題になる。

わが国の学術情報の保存継続の問題について、日本学術会議が2005年に『電子媒体学術情報の恒久的な蓄積・保存・利用体制の整備・確立(要望)』という文書の中で、既に以下の要望を出している。「近時図書館の変容は目覚しく、これまでの印刷媒体の延長線上でのマイクロフィルムによる保存から、電子情報媒体による保存に依存するように変化するだけでなく、出版形態そのものが電子情報媒体による比重が急速に増えている。

他方、電子情報媒体による情報の蓄積は、その情報を取り出すための機器(ハードウェア)それを読み取るためのプログラム等(ソフトウェア)が適切に保存されるか、あるいは媒体の技術変化に即応して、新機種用書き換えて保存するという処置をとらなければ、これまでの印刷媒体・マイクロフィルムと異なって再現利用はほとんど不可能であり、蓄積自体が無に帰着する可能性を持っている。このような点を考慮して、いかに既存の情報を恒久的に保存するかの体制を検討することが必要である」(日本学術会議, 2005)。

さらにいえば、何よりも人にとっての表現欲求の出現方法が、パソコンとインターネットによって変化したということだろう。

津野海太郎の小さなメディアの必要ということから考えるなら、紙がなくても印刷技術がなくても、公開可能な簡単なメディアが必要といえよう（津野，1997）。

本の制作自体が変化していることは、日本でも1990年代後半になって明らかになってきている。2000年代初頭には『Deep Love』『恋空』などケータイ小説が流行する。それに続いてブログ本というネットで公開されたブログを図書として出版し、それがベストセラーになるという現象が起きる。一般人の例としては『実録鬼嫁日記』や2チャンネルからの『電車男』、ほかに糸井重里の「ほぼ日刊イトイ新聞」から出た『オトナ語の謎。』『言いまつがい』などがある（永江，2009）。

とはいえ、手書き原稿がデジタル原稿に代わったからといって、日本語による本の制作現場も簡単になったかという点、そうではないようである。縦書きや漢字の文字コードの違いと組版ソフトの知識に加えてXML (Extensible Markup Language) といったマークアップ言語、加えて電子書籍化を前提とした様々なフォーマットの知識などをこれまで以上に持つことが印刷業界にとって必要となる、というのは大きな問題である（中西，2010）。

アメリカの編集出版業界では電子書籍とプリント・オン・デマンドに特化した会社（秦，2012）が出現しており、日本にもそうした企業が誕生するのも時間の問題かもしれない。

#### 4. 2度目の電子書籍端末経験

2000年代初頭の電子端末経験はΣ Book も LIBRIe のどちらも使いこなす前に、電子書籍コンテンツを供給する電子書籍市場が消滅してしまった。そもそもが、実験的なものであったので仕方のないことだったともいえる。

2010年の「元年」騒動はiPadの発売から始まった。

筆者はあまりに早すぎた撤退に懲りており、電子書籍端末の購入に



は慎重になっていた。早くに独自フォーマットの XMDF を使ったシャープの電子書籍端末 GALAPAGOS は名前が災いしたのかすぐに撤退が決定された。これは企業としてシャープの経営上の問題が大きかったのだらうと今では想像がつくが、それにしても「本」というものと、電子書籍「端末」の思想の違いがあるように感じる。

Amazon の Kindle は日本語フォントの問題が解決されていないこともあって購入をためらっていた。

SONY の新しい Reader は先の LIBRIe の表示が読みやすかったことでもあり、Kindle が同じ E Ink 画面を採用していることから多少期待をしていた。しかし、最初のモデルは Kindle と違い、通信機能を内蔵していなかった。また、前回の読みたいと思うコンテンツが不足していたことや、早期の市場からの撤退を経験していたためにこの購入も躊躇していた。

iPad は機能、使い勝手など Apple のコンピュータ技術の革新性から大きく期待するものがあった。しかし、こちらは電子書籍端末と考えると片手で持って読むにはあまりに重かったし、スマートフォンでの経験から電池の消費が早いという欠点を知っていたので、この点も携帯書籍リーダーとしては判断に迷うところであった。さらに、Apple の電子書籍販売の iBookStore はまだ日本語の電子書籍販売を始めていなかった。

電子書籍端末購入には、価格やコンテンツ数の問題以上に通信回線の環境がよく理解できていなかった、ということもあった。特に通信環境については、NTT の分割民営化以降の急速な変化に筆者がついてゆけなくなっていたということがある。このことは、以前からいらわれている情報格差（デジタル・デバイド）の一つの現れであろうという気もする。

Amazon の Kindle 日本語版は 2012 年にようやく発売になった。Kindle は、それまでの「自炊」と呼ばれる自作 PDF ファイルか青空文庫のコンテンツを利用して読むことから、一歩前進したことになる。この時点で日本語での電子書籍の比較ができる環境が揃ったとい

える。

過去の経験と比較して通信機能が加わったSONYのReaderがLIBRIeと比べて、どう進化したかという点、AmazonのKindle、そしてAppleのiPadを実際に比較するのに、PCを1台買う程度の金額で可能になったということでもあった。Readerには紀伊国屋書店というリアルな店舗を持つ大型書店が加わっていることも、今回の購入理由のひとつだった。

さらに個人的には家の通信環境をWiFiが使えるように換えたことがある。SoftBankの回線を介さずに利用が可能になったのでiPadを試すことができるようになったのだ。

Macintosh SEを1989年頃に購入してOSを漢字Talkを使って以来のMacユーザーとしては、iPhone、iPadが出て、すぐにも使ってみたかった。しかし、回線がSoftBankに固定されていることでなかなか利用に踏み切るこ

とができなかった、というのもおかしなことなのだが、実際のところMacintoshのCPUがモトローラーからインテルに替わってからのMacintoshにはあまり魅力を感じるようになっていたということと、大学でのパソコン利用環境がMicrosoftのWindows OSを使わない限り不便になっているということもあった。

楽天はKindleの発売に続いて、2012年7月にkoboを売り出した。これはカナダで電子書籍事業をし、独自電子書籍端末Kobo eReaderを販売していたKobo社を買収して、日本語にローカライズしたものであった。しかし、楽天のkoboについては青空文庫を自分のイー



図3 Kindle



図4 SONY Reader



図5 iPad

ブックストアのコンテンツ数に水増しするというのもあって、今回の比較実験の購入からは外した。

こうした電子書籍端末の新商品の発売はまだ続いている。2012年12月には NEC 製の Lideo が出された。これは凸版印刷グループで電子書籍ストアサービス「BookLive!」と連携したものである。回線契約が不要で通信料を BookLive が負担するというのは、Kindle と同様の方式である。ただ電子書籍の対応フォーマットに現在最も一般的な PDF がないという点が不便であるように感じる。こうした端末による囲い込みは、電子書籍を購入して「本」を読んでみようと考えてごく一般的な読書人にとっては戸惑いを覚えることだろう。

## 5. 電子書籍端末での読書体験

比較する端末の公表されているスペックを表にしておく。

	Kindle	Reader	iPad
本体の重さ	222g	164g	652g
画面サイズ	6インチ (1024×768ドット)	6インチ (600×800ドット)	9.7インチ (2048×1536ドット)
内蔵メモリ	2G	2G	16G
通信機能	無線 LAN (IEEE802.11) モバイル通信網3G	無線 LAN (IEEE802.11)	無線 LAN (IEEE802.11) Bluetooth4.0
対応フォーマット	Kindle (AZW3), TXT, PDF, MOBI, PRC, HTML,DOC, DOCX, JPEG,GIF, PNG, BMP	MNH, XMDF, BOOK, EPUB, PDF, JPEG, GIF, PNG, BMP, TXT	

Kindle と Reader は画面サイズも使われている電子ペーパー E Ink の見え方もほとんど差はない。重量も片手で持ち、あるいは寝転んで読むことに苦痛はない。Kindle は内蔵ライトが組み込まれているので暗い部屋でも読書が可能である点で、Reader よりも筆者には書籍端末として優れているように感じた。iPad はカラーであるという点にグラフ誌のような雑誌を読む点での優位がある。しかし、重量から

して移動時などに片手で持って読んだり、寝転んで読書をするなどということは考えられない。しかし、タブレット PC として作られていることから音をつけ、絵を動かすという特別な電子書籍が提供されている（佐々木譲，2012）。こうなると電子書籍は、これまでの静的な書籍とはまるで違ったものだといえよう。

マンガの電子書籍は日本市場では欠かせない商品のようだが、画面サイズとカラー表示が可能である点からすると iPad に軍配が上がる。しかし、マンガは基本的には白黒での表現がほとんどなので、何巻もからなる長編マンガを携帯可能な電子書籍端末に入れて持ち運べるということでは、Kindle や Reader も十分にその役割を果たすといえる。

また、Kindle には表示言語を設定すると内蔵辞典に『大辞泉』と『プログレッシブ英和中辞典』『Oxford English Dictionary』『The New Oxford American Dictionary』が使えるように設定できる。日本向けの Kindle は国際版ということではほかに中国語辞典、英中辞典、ポルトガル語辞典、フランス語辞典、ドイツ語辞典、スペイン語辞典、イタリア語辞典がダウンロードできるようになっている。

Reader には『大辞林』『ジーニアス英和辞典』『New Oxford American Dictionary』が入っている。

iPad は残念ながら初期設定では内蔵の辞典はない。もちろん有料あるいは無料の辞典を追加することは可能である。コンテンツの仕様によっては画面上で判らないことばを選択すると自動的に内蔵の辞書につながって意味が表示される。PDF ファイルでは当然ながらこの機能は使えない。

結局のところ、新しい電子書籍端末にあってもその端末で購入可能なコンテンツの数が問題となる。

使った限りでは端末によって使用可能な電子書籍販売先で揃えられているものに差があるということの方が問題であると思われた。また、再販制度が電子書籍には適用されていないので販売先によって同じコンテンツにもかかわらず価格が違っているということにも違和感

を覚えた。

アメリカでは紙での新刊発売と電子書籍版が同時に販売されるというところまで市場が進んでいるようだ。Amazon USA で本をチェックするとハードカバー、ペーパーバック、Kindle 版、拡大文字版、オーディオ CD 版というように価格比較ができる。例えば 2013 年 5 月に出版予定の Dan Brown の *Inferno: A Novel* はハードカバーで \$ 29.95 (事前注文価 17.97) Kindle 版 \$ 14.99, 拡大文字ペーパーバック版 \$ 22.64, オーディオ CD 版 \$ 32.96 となっている。Kindle 版はハードカバーよりもかなり安いことがわかる。また Kindle は文字を拡大できるだろうから、弱視者向けの拡大文字版よりも安く入手できることになる。こうした販売が同じようにできることが今後の日本の電子書籍ビジネスが大きく進むかどうかを左右するように感じる。しかし、現在の再販制度と端末ごとのフォーマットの囲い込みが続く限りなかなか難しいだろう。

町の書店がなくなり、雑誌の廃刊休刊が続き、新刊書が売れなくなったといわれている中で、電子書籍、加えて電子版新聞がアメリカのように売れ行きを伸ばすのであろうか。ぶ厚いハードカバー本が電子書籍版と同時に発売される場合には、読み物としてなら同じ価格であつても電子書籍で購入するという選択はあるだろう。しかし、3 年後の文庫版と電子書籍ではどうであろうか。スーパーマーケットで売られているペーパーバックと日本の文庫本を比べるならこれは判断に迷うところだ。今の電子書籍端末の性能では文庫本よりも読みやすいとはいえないだろう。ただ旅先に文庫本を何冊も持ち歩くのは面倒だが Kindle や Reader を 1 台鞆に詰めてというのは充分に考えられる選択肢だ。娯楽としての読書という行為ならこれで充分といえるだろう。

PDF ファイルを入れておくことで仕事の資料を大量に持ち運ぶことができるというのは、ノートパソコンと並べて使うならさらに便利なことだろう。

## 6. 読書論から考える電子書籍

次に電子書籍がかなりの程度広まったといえるなかで、最近の読書論をいくつか比較検討してみる。

2012年のビジネス書のベストセラーになった佐藤優の『読書の技法：誰でも本物の知識が身につく熟読術・速読術「超」入門』東洋経済新報社（2012）をみてみよう。これは、電子書籍でも刊行されており、紙版が1,575円（税込み）、Amazon Kindle版1,143円（税抜き表示）、SONY ReaderStore 1,200円（税込み）と、一応紙の方が高額に設定されている。しかし、電子書籍も販売書店によって価格表示も違っている。

紙の本と内容を比較すると、トップに掲げられているカラー写真で文具や図書を紹介してるページが白黒になってしまい、力強さを失っている。iPadではKindle版をカラーの状態で読むことができる。それよりも佐藤は読書の際に付箋を貼り鉛筆でマークし、ノートに書き写すという読み方を提案している。これは10年前にやはりベストセラーになった斎藤孝の『三色ボールペンで読む日本語』角川書店（2002）とも似ている。もっとも、斎藤の場合は消すことのできないボールペンであるのに、佐藤は鉛筆とポストイットという、多少は本を大切に扱うという点で、より古典的な方式といえようか。これを電子書籍で読んで、佐藤流を実践しようとしても、ページを折り付箋を付けたり書き込みをするわけにいかないのはおかしな話だ。

「14歳の世渡り術シリーズ」という携帯世代の中高校生向けに書かれた永江朗の『本を味方につける本：自分が変わる読書術』河出書房新社（2012）でも、本に直接書き込み、線を引いたりという行為が読書術として重要なテクニックとして紹介される。たしかに電子書籍にも罫をつけ、マーカーで線を引くようなシステムがあるが、端末によって使用法に違いがありそれぞれの端末での使い方を覚えるということが面倒になる。このあたりが電子端末と、直感的に理解可能とい

う紙の本との差といえよう。毎日のように端末を使っているならいつの間にか身につくことだろう。しかし、これまでの電子機器での経験からみて、3～4年に一度はOSや器機の更新要請があって、操作性が大きく変わるなら、電子書籍は娯楽のための読書以外にはあまり使えないということになる。

一方で義務教育に電子教科書を採用するという施策が文部科学省から提案されている。電子教科書による実験も実施され、実現の方向で動き出しているようだ。これが夢のように教育効果が上がるという説（大谷，2011）と、必ずしもそうではない以上に問題があるという説（新井，2012）に分かれる。

実際の電子教科書のiPad版サンプルをダウンロードしてみると、朗読を聴きながら書き込みや文章に線を引いたり、メモを書いたり、実現するならなかなか面白いことができそうな予感がする。

その一方新井紀子のいうように、現在のハードウェアではモニター画面の制約から全体を一目で見渡すという一覧で比較検討することができなくなることは否めない。上下に重ねられた情報ウィンドウを切り替えて見ることはできるが、並列して一覧することはタブレット端末では無理だ。

とはいえ、教科書に使われる電子端末は読書機能だけに絞られた小さな端末ではなく、携帯に便利なタブレットPCとなることは明らかだろう。無形コンテンツ（文章のみ）はデジタル化され定型コンテンツ（写真、チャート、グラフまたは詩文などが含まれている文章）はiPadと印刷物に分かれるというように「紙の本」と電子書籍の棲み分が進むという考えもある（マクガイア，2012）。

ところで日本の教科書はどのようなOSを使ったものになるのだろうか。国産OSといわれ期待されたTRONは日米貿易摩擦の中で「教育用コンピュータ」に採用されかけながらスーパー301条によって潰されてしまったといわれる（坂村，2002）。

文部科学省の教科書に使われている予算は約400億円で、これは子ども1人あたり4000円となるといわれる。果たしてこれで教科書コ

ンテンツまで含めた端末が配布できるのだろうか（新井，2012）。もちろん大学センター試験での英語の聞き取りテストに使われている単機能のICプレーヤーのように採用され、同一規格で大量に作られるならこの予算でも可能かもしれない。

筆者の利用経験からしても、電子辞書は検索は早いですが、その結果が1項目ごとしか視野に入っていないことに不自由を感じる。冊子体の辞書では見開きで2ページが同時に視野に入り、しかも同時に複数の項目の説明も読むことができるということは、知識を蓄積するという面では差が出るのではなからうか。英語の単語に対して、辞書の最初に記載された日本語の単語を貼付けていくという機械による翻訳と大差のないことが普通になるとしたら、日本人の英語はいつまでたっても実用レベルまでは向上しそうもない。

多くの辞書が電子化されて複数の辞書を携行でき、大部の百科事典さえもが個人で容易に入手できるようになって、便利になったことは明らかであるとしてもである。

これは書誌目録が冊子体からMARC出力のマイクロフィッシュ版に替わり、さらにOPACになって検索は容易になったが、図書カードをページ一面に並べたLCやBLの冊子体書誌目録を一覧しながら予想もしなかった図書を発見するという、偶然の楽しみを奪われたことも重なるように思う。

それ以上に言語脳科学の第一人者といわれる酒井邦嘉の『脳を創る読書：なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか』実業之日本社（2011）によれば、書く力と読む力は想像力によって培われるという。ところがコンピュータでは文字と画面の位置関係が一定しないので空間的手がかりを得ることができずに、想像力が育たないという。紙の本と電子書籍はそれぞれの良さを使い分けることが大切と、酒井はきわめて常識的な結論をくださ（酒井，2011）。しかし、教科書を電子書籍にしてしまっただけではこの大切な想像力が育たないというのでは、学習の意味がないであろう。

大学生に対しても電子学術書の利用実験が行われている。実験では



最初はテキストデータで行われ、次に利用文献を増やすためにスキャンして画像として処理された文献情報も利用したという。慶應義塾大学における実証実験での学生たちの反応は、コンテンツに関する要望が増えていったと報告される。さらに正字率が99.975%のスキャンされた文字テキストデータでなくても、想像力で補える画像であろうとも、とにかく読みたい本が欲しいということである。ほかには「検索できる」ことが重要ということであった。しかも「複数書籍間での全文検索」に支持が偏るという。この「検索」重視ということは電子書籍として読むことに関しても紙の本より読みやすいということではなく、「確認できる」程度に読むことができるとよい、ということであるとされる。いわゆる「自炊」というスキャンでのPDFファイルデータで多少画像が不鮮明であろうとも、確認できれば十分に利用に耐えうるとのことだ。

ここでも学生あるいは社会人にとっての学習、仕事でじっくりと読むには、紙の本によるものがまだ主流ということになる（島田, 2012）という楽観的な見方もあるが、検索で関係のありそうな項目にさっと目を通して、軽く分かったような気になるだけの人が増えて、じっくりと読むという体験があるのは絶滅危惧人種になるかもしれない。

## 7. 紙の本と電子書籍と書架の関係

電子書籍が端末上に増えてゆくと画面上での見せ方にも工夫が必要になる。タイトルだけのリスト表示という単純なものから表紙を面出しして見せるという方法をとることもできる。書店での棚と平台での展開に相当するだろうか。しかし紙の本のような自由度、容易さはない。これはソフトの自由度があがると解決できることかもしれないが、人の考えるような有機的な並びはまだ無理だろう。棚に紙の本を並べることによって新しい知の結びつきが創造されるというのは松岡正剛の丸善書店丸の内店で松丸本舗の実験で証明された（松岡,

2012) (柴野, 2012). バーチャルな電子書籍端末内ではこれは無理なことだろう. 現実には個人が実践するとなると, かなりの量の本とそれを置くスペースが必要となるわけで, ほとんど無理であろう. 結局はスペースを確保しようとする紙の本よりは電子書籍にし, これまでの蔵書を自分でスキャンし PDF ファイル化するという作業が加わる. そして電子書籍端末内のこれらのファイルを効率よく検索できるシステムをいかに構築するか, ということに落ち着くだろう. 蔵書スペースに限りのあるごく普通の読書人にとっては, 大量の本を処理するにはバーチャルな形にならざるを得ないのだろう. しかし, ここからは松丸本舗のように新たな創造的な広がりのある読書環境にはつなげてゆかないのだ.

どうやら, ヒトは肉体的な動きを加えることが思考を深めるためには欠かせないようだ. 読書にも本の厚みと持ち重りを感じながら, ページをめくる指触りで, 読んだ量を確認するという行為が必要なようだ.

## 8. 電子書籍と図書館

紙の本という形を取らない電子出版物が公開されるようになると, 図書館もその蒐集と貸出に踏み切る必要が出てくる. 日本では公共図書館として, 初めて電子書籍の貸し出しを始めたのが指定管理者制度でリニューアルされた千代田図書館だ. 電子書籍をインターネット経由で貸し出すというサービスである. Windows OS と iOS に対応したソフトを入れて EBKS, XML, PDF, Flash の各ファイルタイプの電子書籍が 24 時間いつでも貸出・返却できるように設計されている. 1 人 5 冊まで 14 日間という制限で, 期限になると利用ができなくなるようになっていく. また, プリントアウト, 画面コピー, テキストファイルへの出力はできなくなっている.

岩見沢市の図書館では, 2002 年 6 月に「岩波文庫」, 「東洋文庫」, そして, マンガなど電子書籍の閲覧サービスを市民向けに開始した.

この時はイーブックイニシアティブジャパンから電子文庫を一括購入して、図書館内の専用のパソコンで閲覧させるということであったが、現在は中止している（文化庁、2010）。

札幌市立図書館でも電子書籍の貸出実験が2011～2年に実施され、その報告が出されている。2011年10月に500名のモニターと200タイトルの地域資料を利用して始まったものである。使用したデバイスはパソコン、タブレット端末（iPadとAndroid端末のLifeTouch）、スマートフォンとテレビだった。フォーマットは電子図書館向けのWbookという形式で一般的なものではなかった。ダウンロード方式で貸出期間が終わるとサーバーからの命令で消えるようになっている。実験前は、電子書籍を読んだこともないし、今後も読みたくないという回答が47%で、読みたい47%と拮抗していたのが、終わってみると今後も電子図書館を利用したいが66%になっている。地域資料として紙媒体だけでなく、特に行政の持つ資料を電子化して保存し公開するという点に情報発信の意義をみている。それよりも実証実験の座談会での発言に「電子サービスを使ってみたら図書館に行きたくなった」という若いモニターの話があり、さらなるコンテンツの充実によって新たな利用者を掘り起こすことが期待できるだろう（札幌市中央図書館、2012）。リアルな図書館の棚にある本をブラウザしながら、立ち止まって手に取るというのが重要なことだろう。

大学図書館では学術書に特化した図書館契約型の電子書籍配信サービスを利用するということが始まっている。電子書籍を紀伊國屋のような代理店を経由してネットで利用するというものだ。しかし、和書の学術電子書籍は点数が少なく、主に海外制作の洋書になっている。紙の本もありながら電子書籍を図書館に入れてもらうには、全文検索システムが付いているような付加価値が必要であるようだ。日本語の書籍からOCRで電子書籍版を作ろうとすると、旧字体を多く含むものは正字率わずか60%だったということだ。そこで検索に主眼を置いてユニコードの新字に置き換えてテキストデータを作っているという。これでは日本語の学術書の電子書籍化は高額なものになって

しまうだろう（ず・ぼん，2011）。また，ユニコードについてはアメリカ製 OS のグローバル化に押し切られた妥協の産物ともいえ，漢字文化圏の国々においてはまだ検討すべき問題が残されている（加藤，2000），（坂村，2001）。

一方国立国会図書館で進められている PDF でのデジタルアーカイブ化も含め，じっくり読むための資料と，検索して確認するだけの資料とでは電子コンテンツの作り方にも差ができそうである。幕末の黒船のように登場した Google による電子書籍化問題（ジャンヌネー，2007）（福井，2011）での著作権を巡る交渉では，日本を含む英語圏外の国の著作物が対象外となったことについて，国立国会図書館で積極的に電子化を進めている長尾真前館長は 2009 年 12 月 7 日の「ウェブ学会シンポジウム」の基調講演で，「（米英などで）たいいていの人々が Google ブック検索で本を調べるが，日本の書物は一切出てこない」という結果になることを懸念し，Google ブック検索に参加しないなら，「日本独自で書物をきちんとスキャンし，世界にネット発信していく」という努力がない限り，世界に永久に無視される危険性がある」と述べたという（ITMedia News，2009）。

学術文献の分野では，文学テキスト変遷を時系列も合わせて多層に記録して分析するために文学作品をデジタル化するという「編集文献学」という新しい研究が着々と進んでいるようだ（シリングスバーク，2009）。

## 9. 結論にならない結び

電子書籍化の点数，販売量，価格と，すべてにおいて先んじているアメリカでこんな記事を見つけた。iPad を買ってから紙の本を買わなくなったという筆者 Abell は，それでも紙の本が勝っている 5 つの理由をまとめていた。(1) 電子書籍は読了することが難しい。(2) 本を一か所にまとめておけない。(3) 考えを書き込む余白がない。(4) 読み捨てなのに価格が釣り合わない。(5) 電子書籍はインテリアにな

らない (Abell, 2011) これには笑ったものの、なかなか含蓄のある指摘である。

絶版あるいは品切れ図書の多い日本の出版事情を考えると、電子書籍による出版はある意味で喜ばしい (松浦, 2011)。また、少数数の出版しか期待できない学術専門書にとっても意義のあるものといえよう。しかし、現在の電子書籍リーダーを含め環境は未だ成熟していないと考えられる。なにしろ電子書籍端末が違えば読むことのできる本が違ってしまふのだから。持ってゆく端末によって読めるものが違うのでは複数の端末を持ち運ぶ必要があることになる。これではせっかくの電子書籍の利点がないに等しい。将来についていえばまだまだ進化(?) することであろう。しかし、その端末の開発に要するテストとコストを利用者に求めるような現在のパソコンの売り方を従来の「紙の本」の読者にも求め続けるならば、電子書籍などなくてもよいと、溢れかえった本の山に脅えながらも独りごちるのだ。

付記：

本稿入稿直後に柳与志夫「我が国の電子書籍流通における出版界の動向と政府の役割：現状と今後の課題」『レファレンス』(738) (7, 2012) を手にした。これまでの日本における電子書籍の歴史を、業界と行政の関係をまじえ多数の資料を基に整理論述されている。本稿はこれに屋上屋を重ねることになってしまった感を拭えない。しかし、論旨そのものに大きく変更を加える必要はないことに加え、筆者の経験に基づくものとして多少の意義はあるだろうと考え、このまま掲載する。

参考文献

- アスキー PC 編集部編 (2012) 『今すぐ Kindle で電子書籍が読める本』, アスキー・メディアワークス  
 新井紀子 (2012) 『ほんとうにいいの? デジタル教科書』 (岩波ブックレット; 859), 岩波書店

- 安藤栄作 (2011) 『電子出版の環境整備』, 総務省情報流通振興課  
([http://aebs.or.jp/pdf/E\\_publishing\\_Environmental\\_improvement.pdf](http://aebs.or.jp/pdf/E_publishing_Environmental_improvement.pdf))
- 植村八潮 (2010) 『電子出版の構図：実体のない書物の行方』, 印刷学会出版部
- 歌田明弘 (2010) 『電子書籍の時代は本当に来るのか』 (ちくま新書), 筑摩書房
- 内野安彦 (2012) 『図書館はラビリンス：だから図書館めぐりはやめられない：Part2』, 樹村房
- 大口克人 (2011/8/31) 「ジョブズ氏に仰天させられ続けたマックユーザーの幸福」『日本経済新聞 電子版』  
(<http://www.nikkei.com/article/DGXZZO34367380Z20C11A800000/>)
- 大谷和利 (2011) 『iPad がつくる未来：1 台のタブレット端末から始まるビジネス&ライフスタイル革命』 (アスキー新書), アスキー・メディアワークス
- 大原ケイ (2010) 『ルポ電子書籍大国アメリカ』 (アスキー新書), アスキー・メディアワークス
- 岡本真, 仲俣暁生編著 (2010) 『ブックビジネス 2.0: ウェブ時代の新しい本の生態系』, 実業之日本社
- 面谷信 (2003) 『紙への挑戦電子ペーパー：情報世界を変えるメディア』, 森北出版
- 加藤弘一 (2000) 『電腦社会の日本語』 (文春新書), 文藝春秋
- 川崎堅二・土岐義恵 (2010) 『電子書籍で生き残る技術：紙との差, 規格の差を乗り越える』, オーム社
- 小林弘人 (2009) 『新世紀メディア論：新聞・雑誌が死ぬ前に』, バジリコ
- 斎藤誠一 [ほか] 「座談会・図書館と電子書籍」『ず・ぼん：図書館とメディアの本』 (16), (11, 2011)
- 斎藤孝 (2002) 『三色ボールペンで読む日本語』, 角川書店
- 酒井邦嘉 (2011) 『脳を創る読書：なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか』, 実業之日本社
- 坂村健 (2002) 『21 世紀日本の情報戦略』, 岩波書店
- (2001) 『情報文明の日本モデル：TRON が拓く次世代 IT 戦略』 (PHP 新書), PHP 研究所
- 佐々木譲 [文]; 清原みどり [絵]; 竹本利郎 [音楽] (2012) 『図書館の子』 (iTunes 版 ¥350, 紙版 CD 付 ¥3,675 (税込)), Joh's Picture Book Project
- 佐々木大輔 (2012) 『セルフパブリッシング狂時代：紙の代替ではなくウエ

- ブの延長としての電子書籍』（第2版 Kindle 書籍版）
- 佐々木俊尚（2010）『電子書籍の衝撃：本はいかに崩壊し、いかに復活するか？』、ディスカヴァー・トゥエンティワン
- （2010）「電子書籍の開放を阻むべきではない」2010-04-14 13:03:12  
（[http://japan.cnet.com/blog/sasaki/2010/04/14/entry\\_27039063/](http://japan.cnet.com/blog/sasaki/2010/04/14/entry_27039063/)）
- 佐藤優（2012）『読書の技法：誰でも本物の知識が身につく熟読術・速読術「超」入門』、東洋経済新報社
- 札幌市中央図書館「札幌市中央図書館の電子図書館実証実験」、『ず・ほん』（web版）、（18-2）（3, 2012）
- 柴野京子（2012）『書物の環境論』（現代社会学ライブラリー；4）、弘文堂
- 島田貴史（2012）「慶應義塾大学における電子学術書利用実験プロジェクト最終報告：既刊書・電子学術書の学術利用の可能性」、『情報管理』55（5）、318-328（8, 2012）
- 清水徹（2001）『書物について：その形而下学と形而上学』、岩波書店
- 菅谷克行（2012）「電子媒体上の読書に関する一考察」『人文コミュニケーション学科論集』（茨城大学人文学部）（12）
- 関山健治（2001）「電子辞書の歴史とこれから」（Sekky's Website より）  
（<http://sekky.tripod.com/jisho.html>）
- 総務省、情報通信国際戦略局情報通信経済室（2010）『電子書籍に関する利用状況についての調査研究報告書』、総務省（[http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/linkdata/h22\\_07\\_houkoku.pdf](http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/linkdata/h22_07_houkoku.pdf)）
- 高島利行 [ほか]（2010）『電子書籍と出版：デジタル／ネットワーク化するメディア』、ポット出版
- 宝島社（2010）『電子書籍の正体：出版界に黒船は本当にやってきたのか!』（別冊宝島 Nonfiction）、宝島社
- 武井一巳（2010）『アップル vs アマゾン vs グーグル：電子書籍、そしてその「次」をめぐる戦い』（マイコミ新書）、毎日コミュニケーションズ
- 田代真人『電子書籍元年：iPad & キンドルで本と出版業界は激変するか?』、インプレスジャパン（2010）
- 立入勝義（2011）『電子出版の未来図』（PHP新書）、PHP研究所
- 津野海太郎（2011）『図書館の電子化と無料原則：特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩大4回総会（2011・5・29）』（Tama Depo booklet；6）、けやき出版
- （2010）『電子本をバカにするなかれ：書物史の第三の革命』、国書刊行会
- （1997）『小さなメディアの必要：電子版』、（晶文社版1981）

- (1996) 『本はどのように消えてゆくのか』, 晶文社
- 富田倫生 (1998) 『インターネット快適読書術』 (メディアとコミュニケーション叢書; 2), ひつじ書房
- (1997) 『本の未来』 (ASCII books), アスキー (青空文庫電子版あり)
- (1994) 『パソコン創世記』, TBS. プリタニカ
- 中西秀彦 (2010) 『我, 電子書籍の抵抗勢力たらんと欲す』, 印刷学会出版部
- 永江朗 (2012) 『本を味方につける本: 自分が変わる読書術』 (14歳の世渡り術シリーズ), 河出書房新社
- (2010) 『本の現場: 本はどう生まれ, だれに読まれているか』, ポット出版
- 長尾真 (2010) 『情報を読む力, 学問する心』 (シリーズ「自伝」my life my world), ミネルヴァ書房
- , 遠藤薫, 吉見俊哉編 (2010a) 『書物と映像の未来: ゲーグル化する世界の知の課題とは』, 岩波書店
- インタビュー (2010b) 「国立国会図書館の蔵書電子化と未来の図書館の姿」 H H News & Reports, (2010, 12,6)  
([http://www.hummingheads.co.jp/reports/interview/n0101206/interview51\\_01.html](http://www.hummingheads.co.jp/reports/interview/n0101206/interview51_01.html))
- 西田宗千佳監修 (2013) 『電子書籍: これ1冊で完全理解』 (日経BPパソコンベストムック), 日経BP
- (2012) 『ソニーとアップル: 2大ブランドの次なるステージ』, 朝日新聞出版 (電子版)
- (2010) 『電子書籍革命の真実: 未来の本 本のミライ』, エンターブレイン (電子版)
- (2010a) 『iPad vs. キンドル: 日本を巻き込む電子書籍戦争の舞台裏』
- 日本学術会議 (2005) 『電子媒体学術情報の恒久的な蓄積・保存・利用体制の整備・確立 (要望)』 (<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/comment/050915.html>)
- 野口英司 (2005) 『インターネット図書館 青空文庫』, はる書房
- 野村総合研究所 (2011) 『2015年の電子書籍: 現状と未来を読む』, 東洋経済新報社
- 萩野正昭 (2010) 『電子書籍奮戦記』, 新潮社 (2012 電子書籍改訂版)
- 秦隆司 (2012) 『アメリカン・エディターズ: アメリカの編集者たちが語



- る出版界の話 (eブックジャム) 』(電子書籍), ボイジャー (<http://bookjambooks.com/>)
- 日垣隆 (2011) 『電子書籍を日本一売ってみたいけれど, やっぱり紙の本が好き』, 講談社
- 福井健策 (2011) 「国立図書館法を改正し, 投稿機能付きの全メディア・アーカイブと権利情報データベースを始動せよ」『日本知財学会誌』, 7 (3) (3, 2011)
- ブックジャム・ブックス編集部編 (2012) 『ニューヨークの夜と文学ギャングたち: ザ・ベスト・オブ・アメリカン・ブックジャム』(電子書籍), ボイジャー (<http://www.voyager.co.jp>)
- 文化庁 (2010) 「電子書籍の流通と利用の円滑化に関する検討会議 (第2回) 議事録」, (<http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/kondankaitou/denshishoseki/02/gijiroku.html>)
- 前田暎 (2009) 『紙の本が減びるとき?』, 青土社
- 松浦晋也 (2011) 『電子書籍についての15の考察: 次世代にいかに情報を引き継ぐべきか』(電子書籍版), 日経BP社
- 松岡正剛 (2012) 『松丸本舗主義: 奇蹟の本屋, 3年間の挑戦。』, 青幻舎  
——— (2010) 『松岡正剛の書棚: 松丸本舗の挑戦』, 中央公論新社
- まつもとあつし (2010) 『生き残るメディア死ぬメディア: 出版・映像ビジネスのゆくえ』(アスキー新書), アスキー・メディアワークス
- 三田誠広 (2003) 『図書館への私の提言』(図書館の現場; 2), 勁草書房
- 皆神龍太郎 (2010) 『iPadでつくる「究極の電子書齋」: 蔵書はすべてデジタル化しなさい!』(講談社+α新書), 講談社
- 村瀬拓男 (2010) 『電子書籍の真実』(マイコミ新書), 毎日コミュニケーションズ
- 文部科学省 (2011) 『デジタル教科書・教材, 情報端末WG 検討のまとめ』, (2011年2月23日) <http://jukugi.mext.go.jp/archive/468.pdf>
- 柳与志夫 (2012) 「我が国の電子書籍流通における出版界の動向と政府の役割: 現状と今後の課題」『レファレンス』, (738) (7, 2012)  
——— (2010) 『千代田図書館とは何か: 新しい公共空間の形成』, ポット出版
- 山田順 (2012) 『出版・新聞絶望未来』, 東洋経済新報社  
——— (2011) 『出版大崩壊: 電子書籍の罠』(文春新書), 文藝春秋
- 横山三四郎 (2003) 『ブック革命: 電子書籍が紙の本を超える日』, 日経BP社
- 依田弘作編集 (2010) 『電子書籍の基本からカラクリまでわかる本』, 洋泉

社

- 四方田犬彦 (2007) 『人間を守る読書』 (文春新書), 文藝春秋
- John C. Abell (2011) "5 Reasons Why E-Books Aren't There Yet", *Wired* (6.3, 2011) (<http://www.wired.com/business/2011/06/ebooks-not-there-yet/all/1/>)
- ウンベルト・エーコ, ジャン＝クロード・カリエール; 工藤妙子訳 (2010) 『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』, 阪急コミュニケーションズ
- ジャン＝ノエル・ジャンヌネー, 佐々木勉訳 (2007) 『Google との闘い: 文化の多様性を守るために』, 岩波書店
- ヒュー・マクガイア, ブライアン・オレアリ編 (2012) 『マニフェスト: 本の未来』 (先行公開版) ボイジャー BinB で web 公開 (Book: Futurist's manifest) (<http://www.voyager.co.jp>)
- アロン・シェパード; 平林祥訳 (2010) 『私にはもう出版社はいらない: キンドル・POD・セルフパブリッシングでベストセラーを作る方法』, WAVE 出版
- ピーター・シリングスバーク; 明星聖子, 大久保謙, 神崎正英訳 (2009) 『ゲーテンベルクからグーグルへ: 文学テキストのデジタル化と編集文献学』, 慶應義塾大学出版会
- スティーブン・ウィンドウォーカー, 倉骨彰訳 (2010) 『Kindle 解体新書: 驚異の携帯端末活用法のすべて』, 日経 BP 社
- 「日本の著作物、世界から無視される恐れも」長尾館長, Google ブック検索「対象外」に懸念『IT Media ニュース』(07, 12, 2009) (<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/0912/07/news077.html>)
- 「図書館電子化への課題」『ず・ぼん: 図書館とメディアの本』(17) (12, 2011)
- 「特集 Google の思想」『現代思想』, 青土社 39 (1) (1, 2011)
- 「特集電子書籍を読む」『ユリイカ』, 青土社 (584) (8, 2010)
- 「図書館・アーカイブズとは何か」『別冊環』, 藤原書店 (15) (11, 2008)
- 『電子書籍ビジネス調査報告書: eBook Marketing Report』, (インプレスインターネット生活研究所調査報告書シリーズ), インプレス (2004.11-2005.9)